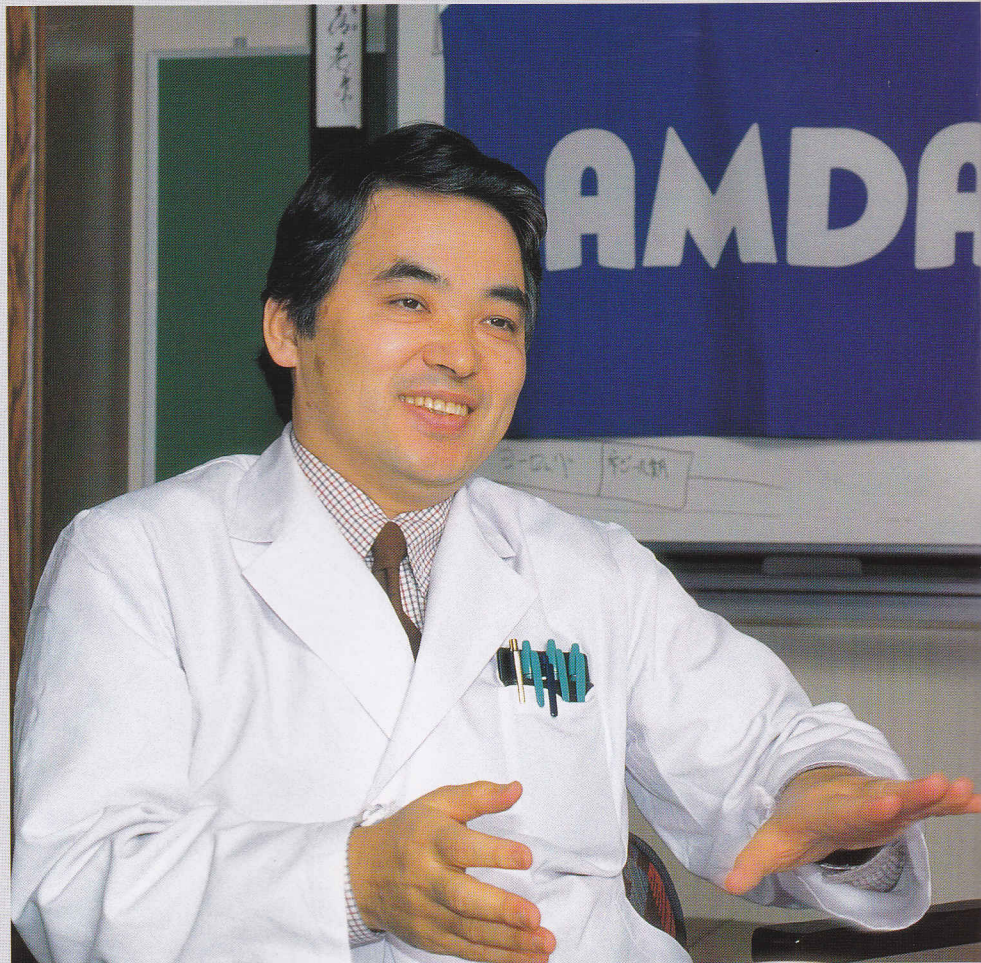


岡山発信の国際医療貢献

AMDAを指揮するアジアの情熱



菅波 *Shigeru Suganami* 茂先生

岡山市・アスカ国際クリニック, AMDA代表

1946年、広島県生まれ。1977年、岡山大学医学部大学院卒業(公衆衛生)。同年、岡山大学医学部第一内科入局、心臓病センター榊原病院勤務、1981年、菅波内科医院(現アスカ国際クリニック)開業。1984年、アジア医師連絡協議会(AMDA)設立。1986年、地域型デイサービス「平津学区シルバーコミュニティ」組織。1990年、老人保健施設「すこやか苑」開設。1992年、「あすか在宅介護支援センター」開設。1993年、「アスカ訪問看護ステーション」開設。著書に「遥かなる夢」他多数。

一枚の写真との出会い

1963年夏、セミがうるさいくらいに鳴いていたある真昼のことであった。高校2年の青年の目は、一枚の写真にくぎ付けになった。ちょうど、彼と同年くらいの一人の日本人兵士が、海岸の浅瀬に顔を半分つつこんで死んでいる写真であった。そのなぜかやすらかな写真の兵士の死に顔に、しばらく金縛りにあったように目を離すことができなかった。

『なぜ彼がこのような死に方をしたの

か…』

このとき心に抱いた疑問が、今日まで菅波先生をアジアの大地へと導くことになるきっかけとなったのだ。

多国籍医師団

アジア医師連絡協議会(AMDA: Association of Medical Doctor of Asia)は、菅波茂先生が代表をつとめる、世界25か国に支部をもつ国連登録NGOである。AMDAは、アジア医学生連絡



●コソボ難民救助活動



協議会 (AMSA) 等の13年間の活動ののち、医師となった彼らの受け皿として、1984年に設立された。

たった28年間でAMDAが飛躍的に大きくなった理由は何なのだろうか。

「この間、1978年のカンボジア難民、1990年の湾岸戦争、1995年の阪神大震災という3つのエポックがあり、NGOが急速に社会的認知を受けたという背景があります。そして、AMDAが突出して伸びた最大の理由は多国籍の組織だということです。緊急事態発生時の派遣メンバーは、多言語、多宗教、多文化の医師で構成されます。一方、日本にもたくさんのNGOがありますが、日本に本部があって、海外に支部をもつのはAMDAだけなのです」と菅波先生は語る。

AMDAの人道援助の3原則とローカルイニシアティブ

「明確なコンセプトを持っていないと人はネットワークをつくれません」と菅波先生。

AMDAには人道援助の3原則がある。1番目は“誰でも他人の役に立ちたい気持ちはある”、2番目は“この気持ちの前に国境、宗教、文化等の壁はない”、そして3番目が“援助を受ける側にもプライドはある”というものだ。

「とくに3番目は重要です。これは、人道援助というのは先進国の専売特許ではないんだということの裏返しなんです。AMDAが広がった理由には、今まで先進国が発展途上国の人たちの気持ちを見落としていたものを、私たちの原則が一つにしたということもあるでしょうね。

それからもう一つ、今までの国連とか先進国のやり方は、ある発展途上国で災害が起こると、他国の団体がリーダーシップをとるというスポンサーイニシアティブだったわけです。これでは現地の人たちは面白くないですよ。AMDAでは、たとえばパキスタンで何か大きな災害が起きたら、AMDAパキスタン支部のパキスタン人がイニシアティブをとると、ローカルイニシアティブという考え方をとっているのです。自分たちは世の中のもの

すごくいいことをしているんだという意識が、実は大きなおせっかいで、現地の人々が結局は不幸になってしまっただけじゃないからね。」

“幸せ”の実感

これほどアジアの国際貢献に情熱をささげてきた菅波先生だが…、家庭のほうは大丈夫？ちょっと心配になる。

「うちは夫婦仲がいいですよ。それもAMDAのおかげ(笑)。何か心配事や苦労事があると対話がとぎれませんか。一緒に協力しないと乗り切れない状況ですから、ますますお互いに頑張るでしょう。苦労をともにして、自分にはないものを相手ももっていると、そこに尊敬が生まれます。」



●台湾大地震の救援活動

菅波先生の著書『遙かなる夢—国際貢献と地域おこし』の中で、AMDAの会員の第一条件は、“幸せを実感していること”とある。幸せな人のみが他人の幸せを喜び、望むことができると確信するからである。“幸せ”の実感とは突き詰めるところ人間関係であり、人間関係の基本は家庭である。家族の人間関係が重なって、地域社会が形成されている。“幸せ”を実感することは、そういう地域社会の人間関係のなりたちを理解している証でもある。

「家庭でも仕事でも、どんな大きな苦労からも逃げないこと。そこに信頼関係が生まれます。“尊敬”と“信頼”、これがAMDAのネットワークの基本です。AMDAと一緒に苦労しましょう、という団体なのです。そして“相互扶助”。困ったときはお互いさま、という考え方で」と菅波先生。

実際、AMDAのスタッフの方々は、と

てもさくで、まったく知らない人間がそこに座っていても何の違和感もなく受け入れる空気がある。もちろん菅波先生も25か国を仕切っている代表というすばらしい辣腕であるにもかかわらず、肩に力を入れず、ジョーダンをとぼしながら、自然に和やかな空気にしてくれるやさしさがある。なるほどこれがAMDAなのだと思得する。

21世紀は「言葉」の力

さらに、菅波先生は、これからのAMDAについて語ってくれた。

「21世紀のAMDAは、“多様性の共存”ということ提案していきたい。20世紀は大量虐殺など多くの悲劇があり、解決できない問題もたくさんあった。20世紀でできなかったことが多様性の共存だと思うのです。AMDAならばそれができます。それがAMDAの果たす役割だと思うのです。それが日本という国に尊敬と信頼をもたらすものであってほしいと思っています。

トルコの大地震のとき、AMDAジャパン、AMDAアルバニア、そしてAMDA Kosovoが3か国でトルコに対して人道援助を行いました。一方、ボスニアヘルツェゴビナにあるAMDAセルビア共和国支部のメンバーが、AMDAジャパンとともにセルビアの首都ベオグラードでKosovoから逃げてきているセルビア難民に医療援助を行っています。これがどういうことかわかりますか？ Kosovoとボスニアでは殺し合いをやっているわけですよ。同じAMDAから出ているから、殺し合いをやっている人たちがそれぞれできる範囲の人道援助をやっているわけです。ほかのNGOでは絶対できません。AMDAしかできないのです。これが多様性の共存ということです。

21世紀は言葉の力、コンセプト力だと思うのです。これが、これまでの軍事力、経済力にかわる新しい社会影響力だと思います。21世紀はAMDAの勝負の時代です。」

先駆者の目は、力強い輝きをもって語りかける。